

学校名	荒川区立大門小学校
校長名	山口 稔雄

1 平成23年度「学力向上のための調査」結果分析

(1) 明らかになった成果

- 算数での成果を全学年で確認できた。昨年度は研究教科を算数として、問題解決型学習への授業改善を進めたが、「発見する力」では、区の目標値(65.7)に対して全校平均(73.1)の結果を得た。
- 国語では音読指導と読書活動を充実させることによって、3学年で「適応・応用する力」で目標を達成することが出来た。

(2) 課題の分析と改善の視点

- 学びに向かう意欲に課題が見られる。意識調査の結果、学ぶ楽しさや学ぶことの必要感が、持てていないことがわかった。(平均に対して、10～20ポイント)成績の如何に関わらずこうした傾向がみられる。学ぶことによって、知識が増え、増えた知識によって興味関心が増す循環を積み重ねていくことが欠かせない。
- 学ぶ意欲の調査項目に対して、「まったくあてはまらない」と回答した児童が少なくない。授業への興味もてない状況にあると推測される。基礎的・基本的事柄の理解に課題がある児童には個々の児童に合わせたペースで学習に取り組める補習的学習が必要である。こうした児童が学ぶ楽しさを味わい、将来に対しても希望をもてるようにすることが課題である。
- 学ぶ事の自主性、意欲を育成することによって、勉強に対する児童の意識を高め、自律的な学習に変えていく必要がある。一人一人が授業で学んだことを、家庭で振り返る機会を意図的に作っていくことが不可欠である。

2 学力向上を図るための学校としての考え方

- 児童の興味・関心に沿った授業への改善。児童が学習内容に面白さを感じることができるよう、教材研究・研修、授業研究を意図的、計画的に行う。
- 教員が教えて、児童がそれを習っていく授業から、児童が解決すべき問題を持ち、その解決に向けて児童自身が作業し、活動して答えを見つけ出す授業へ改善していく。
- 児童は、手先を使って作業したり、実際に見学して気づいたことをまとめたりして、自分なりの答えを見つけ出す学習には粘り強く取り組む。児童の意欲を高めていくためにも、そうした授業を多く実施する。
- 児童が自分たちに適したペースと道筋で学習できるようにするために、児童相互の「学び合い」を各教科で実施する。そこでは、児童が自分なりに理解し、気づいたことを自分なりにまとめて表現する活動することを行う。
- 友だちと意見を交換しあえる学級集団を育成するため、学級集団を望ましいものにしていく学級会を計画的に実施し、児童一人一人の自治意識、友達のよさを見つけようとする意識を育てていく。